

アクティブラーニングを考える

三田学力研 岡 篤(兵庫)

まず言いたい、始まりがずれている

どうもアクティブラーニングの話になるとつかみ所がない、という感覚になります。その原因の一つは、そもそもの話が大学の講義への反省から話が始まっているからだと考えています。

「大講義では一方的に教師だけが話をする事になりがちである。だから、アクティブラーニングを取り入れよう。」

ということが発端なのであれば、それを小学校に当てはめることに無理があります。我々小学校教員は、何百人を相手に授業をする事はまずありません。四五分間、発問も作業も全くなしに、教師が話をし続けることもほとんどないはずです。

つまり、始まりの時点で小学校の現状とは、ずれがあったということなのです。

みんなが「我こそは」

「で、お前はアクティブラーニングに賛成なのか、反対なのか」と尋ねられれば、これは、「賛成」と言わざるをえません。

ただし、「アクティブ」を「能動的、積極的」と解釈するからです。これはアクティブの反対がパッシブ、つまり受動的とすると分かりやすくなります。

学習の様子が能動的でない方がいい、受動的であるべきだと主張する教師はいるのでしょうか。

学力研のように、ベーシックな部分を重視し、静的な学習が比較的多いサークルであっても、子どもが受動的な方がいいという意見はないはずです。

だから、我こそはアクティブラーニングである、というところから旗が揚がるのです。

どうしても形式をおいたくなる心理がある。アクティブラーニングの始まりにずれがあり、しかしながらほとんどの教師は学習が「アクティブ」であることには賛成である。となると、どうなるか。

目的よりも方法・形式に意識がいきがちになります。方法とはペアトーク、グループ学習、話し合い、座席の形などです。

私のような流行にうといものでも、どれもそれなりに取り入れています。ただ、「今は、アクティブラーニングが大切だから」やるという素直さは私にはありません。それが子どもを伸ばす上で効果があるからです。

「ペアトークやグループ学習を入れないとアクティブラーニングをしていないと言われるから」ということになっていないかは気をつける必要があります。

脳がアクティブか、体がアクティブか

アクティブラーニングの話をするときに私がよくいうことがあります。「脳がアクティブか、体がアクティブか」です。

百マス計算を現状の文脈の中で「アクテ

「イブラーニング」だと主張するつもりはありません。ありませんが、百マス計算に集中しているときの子どもは、非常に「アクティブ」ではあるといえるのではないのでしょうか。じっとしているので、体はアクティブとはいえませんね。

一方、授業中、ふらふらと立ち歩いている子の脳は学習に関しては「アクティブ」ではありません。しかし、動いている分、体は「アクティブ」といえるかもしれません。

形式や方法だけを追うと、この立ち歩いている子をアクティブラーニングだと褒め称えるような愚を犯しかねません。(新学力観のときは同じようなことがありました)

学力研だつてアクティブ

以上のような意識があるので、私は「アクティブラーニング」といわれるものをそれほど積極的に取り入れようとは思っていません。

ただし、読み書き計算をベースにした、どの子も伸ばす実践の延長線上に、あるいは、この実践の充実のために、ペアトーク

やグループ学習などが必要であれば取り入れるといったところです。

例えば、音読練習であれば、私は交換読みという方法をよく使います。隣同士で教科書を交換するやり方です。これは、ずっと前からやっているのですが、始めた頃は、アクティブという言葉も知りませんでした。それでも、一斉読みではやらない子がいるのでどうしたらよいかという試行錯誤の中でたどり着いた方法です。

ペアで取り組み、鉛筆を持って音読を聞くという形式は、今なら、とてもアクティブラーニング的かもしれません。

また、私の実践課題の一つに、イメージ化があります。

「この文を読んで何がイメージできますか」と尋ねても、「別に」「どうでもええ」「何もない」などと返ってくるときもありました。

最初は、「四月」といった一つの言葉から何が浮かぶか、ということから少しずつ積み上げていきました。最終的には、物語文を読んでイメージ化するところを自分で選んで、取り組むようになりました。自分が

豊かなイメージを持つていけば、他の子との違いや共通点についても関心がわいてきます。自然に、活発な話し合いになっていきます。

また、それぞれがイメージ化したことは発表したくなるので、時間短縮も兼ねて、黒板すべてを子ども達がイメージ化したことを書き込む段階もつけていました。

子どもが自分でイメージ化する場所を選び、黒板に次々と書いていく、これなども「アクティブ」な印象を与える実践かもしれません。ただ、私にとっては色々やっているうちに結果的にたどり着いたに過ぎません。

さじ加減は指導者の仕事

何をするにも、子どもの状態の把握が大切です。交換読みは、荒れたクラスでも可能でした。一年生でもできました。ただ、現在のクラスではやっています。なぜかというと、ペアの子にチェックをされることに大きなストレスを感じ、それにいつまでも慣れない子が多かったからです。このさじ加減ができるのは指導者だけです。